



エコ生活だった昔の農家(1)

75号('09.11.15 発行)で釣巻さんが書かれた、「武蔵野とススキ」での住民の生活習慣、また、昨年11月の第4回「林の勉強会」での、相場芳憲東農大名誉教授の里山(農用林)に関する講話を機に、関東平野の真ん中の農家で育った子供の頃(昭和20年前後)に体験した生活を振り返ってみた。

生家周辺の農家の概要:

2毛作の田んぼは1反づつに整理された地域で、実家では当時1町5反歩(1.5ヘクタール)程耕していた。養蚕用の桑や自家用の豆や芋などの畑が20%位あり、辺りでは平均的な規模ではなかったらうか、自家用野菜などを作る前栽畑が家の近くにあった。家の3方には樹木が植えてあり、少し広い前庭は脱穀した穀類を筵(ムシロ)で干したり、仮屋根を組んで育ち盛りの蚕の飼育場として使った。裏には藁を保管するため、直幹性の杉などが2~3mの間隔で10本



郷土資料館にある古民家

位は植えてあり、脱穀後の藁の束を立ち木の周りに括って3～4mの高いワラボッチを作っていたが、梯子に乗って括り付ける大人に藁束を渡すのが子供の役割だった。また、多少の燃料を採り北風を防ぐことも兼ねた雑木林があり、クリやクルミなども混じっていた。カキやイチジク、石榴など家によって好みの果木を日当たりの良い処に植えてあった。

稲架(ハサ)や籠、箆作りなどに使う竹林(マダケかハチク)も大抵の家にあり、竹細工の上手い老人が回って籠などを作っていた。竹林の一部は土盛りしたミヅカ(水塚)という洪水時の避難場所として小屋を建て、中に石臼や縄繻い(ナワナイ)器械等も据え付け作業場を兼ねた家もあった。土手が決壊して軒先まで水が来た記憶が一回だけある。屋敷林にはクヌギやコナラなどは植えてなかったが、燃料の粗朶(ソダ)や焚き付け用の杉の小枝などにはことかかず、自宅普請時の建材の一部(ケヤキの大黒柱やスギの柱など)も得ていたようだ。用水路のところどころに、岸に沿ってハンノキやクヌギが沢山植えてあったが、最近は護岸や道路拡幅で切られ昔の面影はない。屋敷林(竹林も含め)も大分減ってしまったようだ。

洗い物をする小川が屋敷林に接して流れていたの、田んぼの中に幅30～40メートルの緑の帯が部落から部落へと繋がっていて、種類は多くなかったが野鳥の群れが移動していた。

農作物は天候に負うところ大なので、神頼み的な(祈願や感謝)生活が随所に見られ、屋内の神棚はもちろん庭先にも小さな祠(八幡さまや弁天様など)が祀っており、その周囲は坪庭と称する園芸スペースがあって、草木を植えて觀賞したり仏前の供花をとったりしていた。落葉した柿の木には、沢庵作りの大根を掛けて干してあるのを見かけた。

稲作り作業：

主要作物の米は、まず家の近くの苗代で苗(最近の機械植えより大きく育てた)を、簡単な台に腰を下ろして苗を採る作業では、水の張った田面に賑やかな話し声が伝わってきた。藁一本で束ねた苗(最近の機械植えより大きかった)を、田掻きのすんだ田に放り投げておき、これを拾い上げては3～4本ずつ植えるのだ。

1反の田の長手方向(30間・54m)に1.5m間隔で棕櫚縄を張り、一人づつ間に入り足を肩幅に開いて立ち、6株(足の間に2株、足の外に各2株)づつ、株間は約25cmで田の端から端まで後

ずさりで植えるのだ。大人は30間ほぼ真っ直ぐ稲株が並ぶが、子供の植えた列はうねうねしていて、稲がかなり育つまでよく分かったものだ。足跡に植える羽目になってしまうと、柔らかい土が無くて周りから土を寄せなければならず、足の運びが悪いと手間取っていた。一人の持分1.5m幅・6株を1ハカと言ったので、捗るとか捗がいくと言う仕事の進み具合を表わす言葉は、このハカから生まれたものと思っていたが、ハカは計とか量と書くことを今回辞書で知った。田の草取りや刈り取り作業も、このハカ単位ですることが多かった。

刈り取った稲は竹のハサに掛けて数日乾かし、家に取り込んで脱穀・乾燥から粳摺り・選穀(米)



徳丸公園のみのりの像

そして俵詰めと進めた。電動化されるまで使った足踏みの脱穀機が残っていて、豆などの雑穀の脱穀に後々まで使った、あのガアコン・ガアコンという音には郷愁を覚える。籾殻を吹き飛ばす唐箕などの懐かしい農具が区の資料館に保存されている。

少ない豆類の脱穀には2m位の竹竿の先にバット位の丸太をとり付け、これを回転させるクルリボウなる農具で、筵の上の豆などを叩いて落す作業も体得した。電動化前には発動機（チーゼル）で脱穀や田への揚水に使っていた家もあったが、苗代など小規模の給水には木製の羽根車に乗り足で回転させる水車も使っていて、子供は2人並んで漕いだりした。田植え前には川を堰き止めて水位を上げて耕地全体に給水したが、この川の深さは2m位になるので、夏休みの子供は日がな一日川で泳いだり、魚を釣ったり、田んぼの溝で箆を使って小魚を捕っていたものだ。

裏作の作業：

米の収穫後、湿っているうちの田を鋤き起こして6m幅で溝を切って水はけを良くし、麦を蒔きアブラナを植えたりした。この裏作には堆肥のほかに下肥を追肥として使っていて、肥桶は天秤棒で親と2人で担いだことが多く、前を子供に担がされた。

しっかり麦に根を張らせるため、2～3月ごろには麦踏みと土入れをした。直径数cmで長さ25cm位の檜の木を、2m位の竹の先に取付けた、ゲートボールのスティックの柄を長くしたような道具を打ち下ろして、凍てついて乾いた畝間の土くれを砕き、細かくなった土を鋤簾で麦の上に振りかける作業だ。土を砕く道具や作業をツブテッコウシ（礫壊し）と呼んでいたが、寒い日には衝撃で手の甲にヒビが切れ、血がにじんだ事がある。

裏作をせずに遊ばせる田は少なく、大麦・小麦の中にレンゲソウ（ゲンゲ）畑にした田んぼやアブラナを植えた田があった。レンゲの種は稲を刈る前に蒔き、春には牛の餌にし、最後は鋤き込んで緑肥にした。花盛りにはよく子供が入って、飛んだりはねたり、花を摘んだりして遊んだものだ。

養蚕：

家は平屋が多かったが、うちは二階があり家財の置き場や蚕が上蔭（繭を作る）時のまぶしを掛ける部屋が2階だった。

蚕は米作りの期間と重なり、春蚕、夏蚕、秋蚕、晩秋蚕、晩晩秋蚕と全てを飼うと食べ盛りの世話は大変な労働になった。春蚕の掃き立ては寒い時期に始まるので、予め一部屋目張りをして炭火で加温し、ホルマリン消毒していた。最初は柔らかい葉を刻んで与え、次には葉で与え、最後は刈り取った枝ごと与えていた。夏蚕以降は葉を摘んで与えたので、人差し指にツメ（指輪に台形の刃を付けたもの）を嵌めて、桑の葉を一枚ずつ摘むが、大人は両手にツメを嵌めて猛烈な速さで摘んでいた。蚕が食べ残した枝葉や糞を適時取り除くのに、両脇に細い木の付いた幅50cm位のネットを乗せてから給餌し、蚕をネットで持ち上げて下を掃除した。このネットが夕方飛び交うヤマトンボを捕まえる子供の格好の道具になった。

家畜：

田畑を耕すのに使う牛馬をどこでも飼っていたが、殆どが牛だった。馬力屋と称した運送屋を兼ねて馬を飼っている家もあったが、馬食というくらいだから馬は餌代が大変なのだ。牛は田を鋤で耕したり代掻き（田掻き）に、また、収穫時の稲や麦を田から持ち帰るとき、俵を運ぶときの

荷車（4輪が多かったが二輪もあった）を曳かせたり、非常に有益な家畜だった。農作業になれない若い牛では、牛の鼻先（鼻輪）を先導する必要がある、特に田掻きのときは一面の水の中を真っ直ぐ歩かせるため、「鼻取り」と称して牛の鼻輪に1メートルくらいの竹の棒をくくりつけ、棒を子供が持って牛を導いた。牛を怖がっているのを見抜かれると、牛になめられて梃子摺ったものだ。また、麦の切り株が足裏に刺さって痛い思いをした記憶もある、みんな素足の時代だったから。



昭和20年代の徳丸田んぼ（写真は語る総集編より）

牛馬の餌は飼葉で、稲藁を「押し切り」で4～5センチに刻み、これを米のとぎ汁やうどんの茹で汁などで湿らせ、粉糠やフスマ（小麦粉を取った後のかす）などをまぶしたのが基本だった。夏は畦や土手（入間川）などの草を刈って与えていたから、家の主力男性は朝飯前に草刈に行き、大きな籠2つに溢れるほど詰め、天秤棒で担いで帰ってくるのが日課だった。

牛舎の敷き藁は、汚れると表に積み上げて堆肥にしていたから、幅1～2mで長さ2～3m、高さが2mにもなる堆肥の山が、春先には何処の庭隅にも出来ていて、醗酵して湯気を立てていた。堆肥は家畜を飼うことの大きな副産物であった。初夏になって堆肥を使い切る頃、地際には大きなカブトムシの幼虫がぞろぞろ出てきたが、関心はなかった。屋敷林の落葉も混ぜて堆肥にしたかも知れないが、いわゆる落葉集めをして堆肥を作ることはなかった。堆肥の醗酵熱はトマト・ナス・サツマイモなど夏野菜の苗を作る苗（温）床の加温にも利用していた。

鶏は何処の家でも10羽くらい放し飼いでいたが、卵は余り食わず回って来る玉子屋に売っていた。ウサギはかなりの家で飼っていたが、ペットではなくて蛋白質源だったし、ヤギも何軒かで飼って乳を飲んでいて、彼等の世話は子供が手伝っていた。

鶏は何処の家でも10羽くらい放し飼いでいたが、卵は余り食わず回って来る玉子屋に売っていた。ウサギはかなりの家で飼っていたが、ペットではなくて蛋白質源だったし、ヤギも何軒かで飼って乳を飲んでいて、彼等の世話は子供が手伝っていた。

燃料：

当時の燃料は藁（稲、大麦、小麦）桑の木の子（春蚕の最後には根元で刈り取って枝ごと蚕に与えたもの）や、桑の根株（更新時に掘り取った古い株）大豆や小豆や秋に枯れたナスの茎なども燃料にした。ナスを燃やすときは「借金ナス、借金ナス・・・（ナスは返すの意）」と言うんだと冗談も聞かされた。初穀（モミガラ）も専用の円筒型の竈（カマド）での煮炊きに使い、燃えるものは何でも燃料にし、燃料を買うことは殆ど無かった。初穀を燃やす竈は傍に付きっきりでなくても良いので便利だった。もちろん、燃やして出来た灰は全て貴重な肥料になった。

近所で炭焼きをしたのを見たことはあるが、趣味的な行為だったようだ。冬の行火（アンカ）などに使う炭は、薪を燃やした時の燐（オキ）を消壺に入れて作った「消し炭」で、春蚕の掃き立てのとき蚕室を温めるのにだけ市販の硬炭（萱製の俵入り）を買って使っていた。薪といえば、クワの根株（更新時に掘り取った古い株）は単純にパツクリと割れず、斧で割るのは大変だった。あらゆる作物から出てくる枯れた殻は、焚き火ではなく全て燃料として使うことで、燃料

はほぼ自給できたようだ。(猪鼻 昭二 以下次号につづく)

雨になってしまった今年の梅まつり

いたばし水と緑の会が梅まつりに参加したきっかけは、コンクリートの池を壊して今のトンボ池をつくることになり、自然の池の理解してもらうために1999年の梅まつり会場でPRさせてもらったのが始まりです。トンボが産卵するけれどヤゴがない(ザリガニに食べられてしまう)カエルが卵を産みにくるけれど、卵もオタマジャクシもすぐになくなってしまふ(ザリガニよりこわい天敵? 子供(or おじいちゃん??)がつかまえて持って帰る) 悩みの多い自然池ですが、ありがたいことに「自然の池」だとみんなが理解してくれるようになりました。

今年は梅もちょうどよい具合に咲いてくれたのですが・・・

初日の3月6日(土)は、今にも降りそうな天気の中、例年通り、フェンスのカギを開けて池を開放。カエルは見あたりませんでした。3月末に暖かい日が続いてやってきたカエルの卵を見てもらいます。パネル3枚(会の活動紹介、赤塚城址周辺の生き物、トンボ池に来たトンボたち)と釣巻さんの昆虫の標本、モグラのはく製を展示。猪鼻さんが手話で展示の説明をしたのに驚き。人気のノコギリ体験は開始前から行列ができて11時前に早々とオープン。自分で輪切りにした枝に絵を描き、好きなリボンでペンダントにする工作はすっかり定着したようです。

応援に駆けつけてくれた仲間のご高齢の鈴木信子会長はじめ10名で、しょぼくれた天候に負けない活気があったのですが、雨でリボンや子ども達の描いた絵が滲んで続けられず2時前に中止。翌7日(日)も雨で取り止めにしました。

寒い時期の屋外の行事は辛いところがあるのですが、「ノコギリ体験で竹の花入れをつくった孫がもう高校生になった」という人の話を聞いたり、徳丸の地主さんから竹をいただいたり、応援に来ていただいたりして励まされています。

活動・観察の記録(2010年1月～)

1月16日(土)トンボ池 気温6、水温3、COD7(年間を通じて池の水質よくない)

1月16日(土) 1月23日(土) 2月20日(土) バッタ広場ササ刈

落ち葉の下切ったばかりのところからアズマネザサの新芽あり。ササの生命力はすごい。

2月6日(土) 7日(日)「環境何でも見本市」(エコポリスセンター)に出展。会の活動と赤塚城址周辺の自然を紹介し好評だった。また他の出展者と交流もできた。

2月24日(水)梅まつりに使用する剪定枝を公園事務所前から溜池まで運ぶ。トンボ池ではカエルが4匹ほどクックッと鳴いていた。

2月27日(土)小雨、作業は中止してゴミ拾い、バッタ広場・トンボ池・ミニトンボ池・全体の様子を観察。トンボ池では、カエル5匹以上、卵塊が1つあった。

溜池の工事は終了。水を入れはじめたときにカエルが多数やってきたが、水が増えるといなくなったそうだ。また放流した魚が多数死んでしまったと聞いた。

3月6日(土)赤塚梅まつりに出展。7日(日)は雨で取り止め。

トラツグミについて

「いたばし野鳥クラブ」おしらせ 2010年 No.3 に板橋区のトラツグミの記録が掲載された。データは2009年12月18日赤塚城址梅林櫻井義一自撃と同年12月29日赤塚公園櫻井義一撮影である。他にもデータ無しの記録が1例掲載されている。

坂本さんから同定してくれと鳥の写真が2枚筆者に送られてきた。添付ファイルを開けると、2枚とも小さく不鮮明であったがトラツグミに間違いはない。下の写真は内1枚を拡大したものである。データは2010年1月23日板橋区赤塚529、赤塚公園浄蓮寺下水路、坂本郁子撮影である。本誌は文献扱いされるようなものではないが、参考のため正確なデータを掲載しておく。これは櫻井氏のものと同一個体かもしれない。



本種は東京付近平野部では冬鳥として知られている鳥だが、1947年以前には都心部の森でも繁殖の記録がある。杉並区では1940年7月に幼鳥の記録が残されている。都下では町田市で1970年の繁殖記録があるが、近年の記録を筆者は聞いたことがない。

冬鳥としての記録も近年は少ないようで、1997年から2005年の皇居の記録には無し、白金自然教育園では1998年に1例記録されている。1993年発行の「板橋区の野鳥実態調査報告書」では1992年赤塚公園で1例記録

されている。その他埋もれたデータがかなりあると思われるが、筆者は鳥のデータは昆虫ほど熱心に集めておらず実態は不明である。鳥は愛好者は多いが信頼できるデータの蓄積という点では昆虫より遅れているようだ。

トラツグミの昼と夜

大部昔の話だが丹沢の山中で夜になると奇怪な音が聞こえると、新聞記事になったことがある。妖怪か宇宙人の通信音かと話題になり、大勢の人が押し寄せたようだ。正体は本種の鳴き声であった。「ヌエ」の正体も本種だという人が多いようである。夜の山中で近づいたと思ったら、遠ざかり、また近づいてくるヒー、ヒーという声を知らない人が聴いたら、さぞ恐ろしいであろう。

冬、平野にいるトラツグミは明るい陽光のもと、地面を歩き回り、エサを探している。普段は鳴くこともないようで、筆者は冬のトラツグミの声は聞いた経験がない。一方夏の山中では昼間本種を見た経験はない。昼と夜の生活は何を合図にして切り替えているのであろうか。多くの生物で見られるように短日か長日かを計り、切り替えているのか、それとも渡りをきっかけにしているのであろうか。本州だけで見ている限り、渡りの距離は短いように思われるが実態はどうなのであろうか。冬鳥としてのみ本種が見られる南方地域ではどの時間帯に活動しているのであろうか。ヨーロッパでは遠くシベリアから飛んでくる迷鳥のようである。

筆者のトラツグミの記憶を、正確な日時は不明のものが多いが、参考のため記録しておきたい。O埼玉県大滝村川又(標高約600m) 1ex.1970年代半ば4月後半(だったと思う) 夕方、林床で餌を探していたものを双眼鏡で確認。溪流斜面の林内で薄暗かったが同定には問題はない。荒川に架かる橋の上から観察。雁坂トンネルの工事はまだ始まっておらず、川又は静

かな山村だった時代である。川又から2時間ほど歩いた上流の赤沢谷出合辺りからは一面春の淡雪に覆われていた記憶がある。

○埼玉県旧大滝村（現秩父市大滝）和名倉山二瀬尾根（標高約650m）1ex. 2006年11月5日
大除沢の遡行を終え二瀬尾根を下降中、ダム湖によりやく近づいた頃暗くなってしまった。真暗な杉林の中、ヘッドランプの光のなかを素早く飛ぶものがあつた。スズメガかと一瞬思ったがこんなに巨大なスズメガがいる訳はない。100%確実とは言えないが、色、体形からトラツグミと判断した。山の上はもう紅葉もおしまい、水は死ぬほど冷たく沢登りなどやる季節ではないと改めて実感した山行であつた。

○岩手県北上市駒ヶ岳（北斜面）三角沼（標高780m）1980年5月初め

当時、夏油川支流の源頭部にある三角沼はイワナの宝庫であつた。前年の大漁に味を占め、Mと私は再度この地を訪れた。まだやぶは残雪で埋もれ、山スキーを持参している我々は難なく沼にたどり着くという予定であつた。ところがこの年は暖冬のせいか雪は溶け、やぶは見事に立ち上がり行く手を塞いでいる。スキーをかついでの藪漕ぎという貴重な体験をさせて頂いた。釣りをするMは沼に残り、私は一人駒ヶ岳山頂を目指す肩の辺りで気力がつきた。下りもくされ雪で私のスキー技術では手に負えない。

水温はまだ低すぎたようでイワナもろくすっぽ釣れていない。斑雪の斜面にツェルトを張り、ろくなつまみもなく酒を飲む。トラツグミは夜遅くまで飽きもせずツェルトの周りを飛び回り、ヒー、ヒー鳴いていた。

この他鳴声はあちこちの山行の折聞いているが、はっきりとした記憶が残っていない。記録は直ぐつけておかないとやはりだめである。

○東京都武蔵村山市中藤3 仙元神社（狭山丘陵）1ex. 2008年2月10日

車道から神社へ入る道（未舗装）を歩きまわっていた。餌を探していたのであろう、数分間観察することが出来た。周りは雑木林で天候は晴、日陰は数日前に降った雪で覆われており、トラツグミは雪が消えた明るい場所で行動していた。

○東京都西多摩郡瑞穂町高根（狭山丘陵）1ex.2008年2月20日

探餌行動中であらう、山すその歩道（未舗装）を歩きまわっていた。周りは雑木林で天候は晴だった。2月10日に目撃した地点とは大分離れており、多分別個体であらう。

池谷（1990）によれば狭山丘陵ではトラツグミは少ないながら、通年観察されており、繁殖の可能性もあるとされている。

以上の私の乏しい観察例から、無理矢理結論を出してみよう。

トラツグミは早春には山に戻り、縄張りの確保等の繁殖行動を開始するようだ。とすれば本州に生息する本種の渡りの距離はかなり短いことが予想される。繁殖地は広葉樹林帯で、亜高山帯で私は鳴声を聞いた記憶はない。夜から昼への行動時間切り替えには多分日長時間は関係なく、気温や周囲の環境によるかなり可変的なものと私は推測する。冬季の採餌活動は地表面が主なものならば、多雪地帯に住む本種は必ず雪の無い地域に移動するはずである。雪がなくても地面が凍ってしまうような地域にも冬は住めないであらう。

シベリアに住む本種は長距離移動の性質が強く、本州中部以南のトラツグミは漂鳥あるいは留鳥の性格が強い。北海道や本州北部の本種はどこまで飛んでいくのであろうか。渡りの性質が地域により異なっている鳥は一般的には種分化を起こしやすい。北海道の個体群が日本より南方に渡る性質をもし獲得しているのならば、すでに種分化の途中にあると言える。（釣巻岳人）

活動のお知らせ

運営委員会は原則として第4土曜日の作業・観察会の後に赤塚ため池公園そばのラーメン「しらかば」で行い、報告や活動内容などを相談します。どなたでもお気軽にご参加ください。午前中の作業の状況で時間が多少ずれることがあります。雨天で作業が中止の場合も運営委員会は開きます。わからないときは、坂本(090-4618-1295)に御連絡下さい。

4月運営委員会： 4月24日(土) 12:30~13:30

5月運営委員会 5月22日(土) 12:30~13:30

会報の印刷・発送は奇数月。お手伝いできる方はよろしく

日時：5月15日(土) 12:30~

変更する場合もあるので、事務局にお問い合わせ下さい。

活動の問い合わせは事務局瀬田(3969-7124)まで

会では赤塚城址周辺で、私たちが作ったビオトープを中心に自然の変化を観察したり、ゴミ拾いや、ビオトープの環境整備を行っています。観察会は原則として雨天も実施します。

活動日は毎月第3、第4土曜日です。軍手、タオルなど、汚れてもよい服装で。あればカメラ、ルーペ、双眼鏡、図鑑。雨の場合は作業のかわりに全体の観察と、ゴミ拾い等を行います。

3月27日(土) 10:00~12:00 バッタ広場ササ刈等と生き物観察

4月17日(土) 10:00~12:00 トンボ池の調査

4月24日(土) 10:00~12:00 未定

5月15日(土) 10:00~12:00 観察会

集合場所：赤塚トンボ池(板橋美術館そば)

成増4丁目緑地調査(植生調査)(日程が変わる場合もあるので事務局まで連絡下さい)

4月3日(土) 5月1日(土) 10:00~12:00 東上線成増駅集合

毎月1回の定点観察です。(連絡先)坂本090-4618-1295

総会

日時：4月17日(土) 13時~15時 会場：赤塚5丁目集会所

篠原智男先生の「四季のおくりもの植物画展」

日時：3月22日(月)~27日(土) 9:00~16:00(23日は休館日、27日は14:30まで) 場所：赤塚植物園

あなたも会員になってください(年会費2000円：振込先は表紙に記載)

いたばし水と緑の会の活動はすべて会員の会費によってまかなわれています。主な用途は、会報郵送料、印刷費、ビオトープ池維持管理のための資材費、コピー代などです。